

戦後五十年にあたって

大槻 高

昭和十八年十一月一日中国戦線の学徒要員として、北支に集結した。中支湖南省衡陽にて終戦。洞庭湖畔に收容され、昭和二十一年七月に復員した。復員後驚いたのは、兄が戦死していることであつた。紙切れ一枚の骨箱を前に泣き崩れる老いた両親を見て戦争のはかなさを思い、いつか両親の願いをかなえねばと玉砕地レイテ島に行くことを考えていた。

定年となり、その時期がきた。妹たちが同調してくれて八九年七月、八日間でレイテ島を一周した。府の援護課は、何も援助してくれなかつた。

レイテ決戦は、制空権、制海権が米軍の手にあり、地上部隊の兵力も米軍が上陸したときは、一一六師団のみでまともに戦える状態ではなかつた。果たせるかな、一一六師団は

、水際作戦でわずか一週間で組織的には壊滅状態となった。残った兵は山手に逃げやがて「遊兵」となって山中の生活を続けた。最後には栄養失調となって倒れていった。昭和十九年のブラウエン飛行場の奪回作戦は、一一六師団の最後の戦いと言われているが参加した兵力は、二十連隊を中心に百五十名程度と言われている。兄は、この作戦で玉砕したとされている。しかし、それを知る者は誰もいない。援護課の資料では二〇連隊は、ブラウエンで玉砕となっている。兄は、この地で戦死と認定すると記してある。なぜ認定なのか、戦死でないのか、援護課からは返答はない。さて私は、レイテの戦跡めぐり、多くの思いをしたが紙面の都合で二、三とりあげ戦後五十年の記録とする。

激戦地には、慰霊碑が建立されている。その管理は、現地の住民の奉仕という協力である。一一六師団は、主力が京都の部隊である。慰霊碑は一〇か所余りあるが、いずれもそ

の建立は有志の手によるものである。政府も京都府も責任をとっていない。それは何故なのか？

何故このような無謀な決戦を命令したのか、現地住民の激戦の状況を聞くほどに不可解であり、腹が立つ。最終玉砕は九万人であった。その間の状況は大岡昇平氏に「レイテ戦記」に詳しいが御前会議は、何よりも、米軍の本土上陸の日を延ばすことにあり、国体保持の天皇の言葉（命令）が、決戦を左右したのである。しかし、昭和天皇は死ぬ最後までお詫びをしなかった。現在の天皇も、各地を旅行しているが天皇として遺族への謝罪は、聞かない。

これが私の戦後五十年である。